

海翁閑話

豊道春海

亡くなった吉田茂翁と同年だから、私も八十九歳、数え年でいえば九十一歳である。

吉田翁と同年ということがわかったのは、以前大磯の御宅をお訪ねしたとき、老人同志なので、つい年齢のことなども話題になっ

た、そのときである。吉田翁は、あのとおり戦後初の国葬となったほどの人だから、年齢

など誰でも知っているようなものだが、案外そうではなかった。日本書道会の会長なども

引きうけていただいていたのだが、吉田翁の生年月日がわからなくて、直接聞くこともで

きないし困った——などという話を聞いてい

たので、私から持ちだしてみた。すると吉田

翁は、

「私は明治十一年の生れです」という。

「おや、偶然のことながら、私も明治十一年でございます。して、御生れ月は？」

「九月です」

「まことに偶然なことに、私も九月です。

日はいついつでございしますか」

「日は二十五日です」

さすがに日付までは同じではなかった（私は十七日）ものの、生れ月まで同じであるとは、その時まで気がつかなかったことである。

その吉田翁だが、いつお訪ねしても、どん

なに疲れていられても、客の帰るときはきちんと玄關まで送られた。頑固で知られていた人だけれども、私などには実に礼儀正しい人であった。

この礼儀ということは大切なことで、心格外にあらわれる、その形なのである。礼儀作法というけれど、後の方の「作法」の方を問題にするから間違いがおこる。正しい心を持ち、謙虚に人に接する——それが礼儀なので、それがまともでなくてなってしまえば、その人もまたまともでないことになる。八十九歳になって、私はこの礼儀が人間にとってどんなに大切なことがよくわかってきたよ

うに思う。

書道でも、このことは基本的なことである。戦後の現在、書道は隆盛をきわめていると人は云う。

けれど私はかならずしも、その隆盛を喜んでばかりはいない。「書」は流行しても、「道」は衰えて希薄になってしまったからである。この点では、私は心ひそかに嘆息あるのみの毎日なのである。

たとえば、「墨象」とか「前衛書道」とか名づけて、文字から離れた書をもてはやす傾向がある。私は、人に聞かれたときは、「必ずしも悪いとはいえない」ということになっているが、その意味は、これもまた「書道」の正しい自覚にもどる契機を、ほんの少しで持っているならばという条件においてのみいっているのである。波柿もまた使どころがある。熟するのを待てば、たる柿にも変じよう。その意味でのみ、「墨象」「前衛書道」を併せ呑めるのである。「前衛」も結構、しかし尻尾がなくてはいけない。

私などは、「墨象」というより、あのよう

なしわぎは「墨戲」に思われてならない。まづ第一に、あの種のものは「文字」から離れてしまっている。「書」が「文字」から離れてしまえば、「書」ではなくなると、私は考えている。日本の「書」の伝統のようなものを考えるなら、それが「文字」あってはじめて成立するひとつの文化であることは明白なのである。「文字」には、ひとつひとつ意味があり、その意味を心の中に正しくうけとめてこそ、「書く」という行為が、正當な人間の営為として、そして「書」が、文化遺産として永遠の生命を持つのである。

日本の文字の代表は漢字であり、その漢字が現在しだいに国語国字としてのとりあつかいにおいて、崩れかけてきていることも、おそらく現代の「書道」の衰えと大きく関連するのであろう。

私はなげかわしいのだが、文部省の国語にたいする考え方は、この漢字をまるでただの記号のようにうけとっているようである。漢字はあきらかに、文字としては表意文字であるし、しかもはじめは記号だったかもしれない

いが、長い歴史の中で、文字としては独自の文化としての機能をもっている。それを、文部省では漢字制限だの、ローマ字だのといって、故意に表音記号化しようとしている。

私たち日本人の祖先は、非常にすぐれていて、漢字は中国から移入した文字だが、足りないところを仮名の発明によって補い、大陸文化をどしどし吸収してきた。中国では、現代になって漢字の一部の略字化をすすめているが、これはかつての日本の仮名の発明に相当する仕事であってかえって日本の方が、国字の合理化を先にやっていたわけである。日本の今日の発展も、このようなすぐれた文字文化に負うところが非常に大きいといわなければならない。

このような歴史的な意味のある文字としての漢字が、アルファベットの組み立てからなる西洋の文字とはまったくちがうものであることは、むしろ西洋人の方がはっきり理解していることである。それを、何が不都合なのかしらないが、表音化しようとするにいたっては、無謀というのか無知というのか真意の

つかめないしわざとでもいうより他にない。

よく話を聞いてみると、漢字は能率がわるいというようなことを理由にしている。おかしい話があったもので、能率をはかるためにはまづ能力を養うことが必要なのである。その能力養成を考えずに、改革と称して文字文化を破壊しようとしているわけで、まったく本末転倒もはなはだしい話である。

「書」に話をもどすことにしよう。とにかく、日本で「書」が成立するのは、日本の文字があつてのことである。私の「書道」観は、きわめて簡明なもので、「書とは文字を美化したもの」と考えている。つまり書道の美は文字あつてはじめて存在するものなのである。

「書」は、だから何よりも、文字を正しく書くことが基本である。人を弄するような気持で、こけおどしめいた「作品」を作ることとは、「書」ではないのである。

正しく書くためには、その人の心が正しくなくてはいけない。日本では、古来三蹟三筆といった、すぐれた書蹟がある。そして、漢

字には、篆・隸・楷・行・草の五体があり、さらに楷・行・草の三体を基本的書式とみることができる。

したがって、墨の使い方、筆の執り方からはじまって、「書」には、文字を書くための学習修養の体系がおのづからに定まっている。

初心者には、この体系にしたがい、姿勢を正して、一字一劃もゆるがせにしないことからはじめれば、おのづからに心も正されてくるのである。

もちろん、短兵急にことをはかることはできない。「書」ほどに、心の正しさを重んずるものはないから、また階程が重んじられるのである。一步一步、自分の人格をきたえ、養いながら、「書」も高まってゆくのである。

古語に、「書ハ道ナリ」ということばがある。「書」はおのづからに、自己修養を課するという教育的役割もはたすのである。数年前のことだが、小学校における書道必修の採択をめぐって、私は文部省とかけあったが、あの時もし認められなかったなら、私は

割腹も辞さない心境だった。「書」の教育的役割が、お隣りの中国でもちゃんとみとめられ、小学校の一年から「書道」があるのに、日本ではいつの間にか、それを忘れてしまっていたからである。心の正しい人間をつくることが、今ほど必要な時代はないと思えばこそ、私は小学校の書道必修採択に命をかけたのであった。

「書ハ道ナリ」という心構えがあるとき、はじめて、「書」の目的が、たんなるみてくれではなく、人間としての自己の修養へ向ってゆく。千辛万苦、いかにして正しい心を発揮するか、人間として成長するかという努力と、「書」がむすびついてくる。

そのときこそ、「書」は真に人間の魂の精華であり、文化の精神といえるのである。

「書道」は、けっして「芸術」ではない。「書道」は「道」なのである。無限の、はてしない、終りなき「道」なのである。

(談・文責編集部)